

マタイによる福音書 2:13～23

コロナ下にならながらも、今年も主の教会が地上に建てられたことを記念し、ペンテコステ礼拝を共にすることが許されました。そこで、昨年のことを思い出すのですが、昨年のペンテコステは、1回目の緊急事態宣言が解除されたその直後でありました。それゆえ、共に集い、共に礼拝を献げる喜びを強く感じさせられるものでもありました。そして、ペンテコステを祝うことの意義がこの「共に集う」ところにあることを深く実感させられたわけではありますが、ただ、それは今年も同じです。この聖霊降臨の出来事から教会の歩みが始まったように、「共に集う」ことが私たちの信仰を信仰たらしめるものだからです。ただし、それは、だから、集まりさえすればそれで事足りるということではありません。集まることに加えて、私たちの上には聖霊が常に豊かに注がれている、この聖霊の働きを通し、私たち一人一人は、キリストを頭とする教会に連なることが許されているのです。

それゆえ、私たちの信仰は、クリスマス、イースターを祝うだけでは終わりません。もし、それだけで終わってしまったなら、教会は遙か昔に賞味期限を迎えたに違いないからです。つまり、私たちの信仰が教会と切り離され、昔は良かった、あの時は楽しかったと、過去に振り返り懐かしむだけのものなら、十字架と復活の出来事の経験者が尽きた時点で、教会は歴史の中に消えていったに違いないからです。けれども、教会は歴史の荒波を通り抜け、こうして今日を迎えることが許されている、それは、イエス様が再び地上にやって来るその日までを、聖霊なる神が支え、導いてくださっているからです。ですから、そう考えると、聖霊降臨の出来事は、弟子たち、私たちに対する、神様の特別な思いの表れであるということです。なぜなら、弟子たちに対して神様とイエス様がなされたことは、御子をこの世へとお遣わしになり、十字架と復活の出来事によってもう十分だとも言えるからです。それにもかかわ

らず、神様とイエス様は、弟子たちを見放さず、面倒見良く聖霊を注がれた、そして、ある意味、この過保護とも言える面倒見の良さは、聖霊降臨の出来事の直前の弟子たちの姿を見てのことでもありました。

天に昇り、イエス様が神様の右に坐したもうその直後、使徒言行録によれば、弟子集団の中に動揺が大きく広がったと記されています。そこで彼らのしたことが組織の見直しでありましたが、その直後に起こったことがこの聖霊降臨の出来事でもありました。このことはつまり、どんなに知恵を尽くし、思いを尽くしても、よちよち歩きの弟子集団は、神様の目からすれば、危なっかしくて見てはられないものであったということです。ですから、そこで直ぐに手を出したところに、言葉は悪いのですが、神様の過保護さが現されているとも言えるのでしょう。けれども、ここにまた、私たちの信仰の特徴、つまり、こうして主の教会に連なる私たちの信仰のあり方がそのまま現されてもいるのです。それは、私たちの信仰は、未熟さと弱さを特徴としているということです。つまり、弱者の宗教、未熟者の宗教、聖書の御言葉をそのまま素直に聞いていくなら、そのように理解することができるということです。そして、それは、神様が私たちをそれだけよくご存じだからでもあります。まただから、使徒パウロも、コリントの信徒への第二の手紙の中で「わたしたちもキリストに結ばれた者として弱い者です」と言っているのです。

ですから、そういう意味で、私たちはこの聖霊降臨の出来事を誤解しないように注意したいと思います。パウロが先ほどのコリント書の直前で「キリストは、弱さのゆえに十字架につけられました」とこう語っているように、神様とイエス様を後ろ盾とし、強がるところに私たちの特徴があるわけではないからです。そもそものところ言えば、イエス様の誕生についても、十字架と復活の出来事についても、イエス様の周りにある人々の

姿は、弱々しく、稚拙で、見てはられないものでした。しかし、神様は、イエス様と共にあるがゆえに、そこに集まり、連なる人々を守り、導いてくださった、イエス様の父母然り、弟子たち然り、その恵みに与った人々然り、何よりも、一人の例外もなく、皆が皆、意気地がなかったことを、誰の目からも否定できない形で明らかにしてくれているのがイエス様の十字架の出来事なのです。しかし、その私たちを御前に集めてくださるイエス様と私たちとの関わりについて、パウロは「キリストはあなたがたに対しては弱い方でなく、あなたがたの間で強い方です。キリストは、弱さのゆえに十字架につけられました。神の力によって生きておられるのです」と語るのです。つまり、ペンテコステの出来事は、弟子たちがこのことをリアリティーをもって感じさせられる出来事であったということです。それゆえ、ペンテコステは、弟子集団に過ぎなかったものを主の教会という磐石なものに整え直すことになりました。つまり、そのために欠かすことのできないとても大きな出来事がこの聖霊降臨の出来事であったということです。

それゆえ、そこで忘れてならないものが聖霊の働きです。先ほどのパウロの言葉にあるように、私たちが、イエス様が強いお方だと知るのには、聖霊なる神が私たちとイエス様とをダイナミックにつないでくれているからです。そして、それは、ペンテコステ以前とそれ以後の弟子たちの変化を見れば明らかです。聖霊によって、イエス様が生きてなお働いておられることをよりリアルに感じた弟子たちは、それゆえに大胆に、そして、堂々と御言葉を宣べ伝える者とされたからです。つまり、弱い者が強くされた、イエス様との関わりの外にある者にはそのように映ったに違いありません。けれども、この強さであります。パウロが言うように、私たちは依然として弱いままなのです。それは、それぞれの胸に手を当ててみれば分かることです。それだけではありません。ちょうど、聖霊降臨の出来事直後の弟子たちがそうであったように、この世的にも私たちは弱く、この世の大きな力に対しては抗うことのできないものでもあるからです。そして、そのことを如実に現しているのが今日の御言葉でもありますが、イエス様の

誕生を喜び祝ったその直後、この世の事情に振り回されることになったのが、イエス様を大事に大事に抱きかかえる、この若い夫婦であるからです。

ただ、聖霊降臨の出来事を経て、弟子たちは強がるのでもなく、また抗うのでもなく、傍目からすれば強いとしか思えない行動へと駆り立てられていった、それはどうしてなのでしょう。まさに、それが聖霊の力なのですが、では、私たちがもし弟子たちのように大胆な振る舞いがないとしたら、それは、私たちの上に聖霊が吹き注がれてはいないからなのでしょう。また、もしそうであれば、どうしたら聖霊を豊かに受けることができるのでしょうか。今、日本の社会においてキリスト教はかつてのような勢いを失い、どこの教会も苦戦を強いられています。そのような中で、聖霊の働きに期待し、また特化する動きもあります。しかし、何かを期待して、聖霊の働きだけを求め、また祈りを合わせることは、聖書の信仰においては正しいことなのでしょうか。祈りは、聖霊の執り成しによって形有るものとされるのですが、その祈りが実現するのは、聖霊独自の働きによるものではありません。聖霊が神様とイエス様から私たちの許に送り出されるように、聖霊とは交わりを創り出す霊であり、それゆえ、愛の霊であり、喜びをもたらず霊であるということです。ですから、交わりを否定し、また、顧みず、自分だけの願い、自分たちのことだけを願うだけでは、祈りは祈りではありません。その実現だけが祈る目的となり、それゆえ、それをあたかも信仰だと思ふそのような祈りからは、教会という交わりが生み出されることもありません。ですから、そのような祈りは聞き届けられないという形で、御心が現されることにもなりますし、今日の御言葉の中でヘロデの願いが実現しなかったのはそれゆえのことでもありました。ただ、その一方で、聖家族と言われている幼子イエスをその懐に抱くこの若い夫婦についてはどうでしょうか。その置かれた過酷な定めを見て、また、この境遇に同じように置かれたとしたなら、どれだけの人々が、そこに祈りの力と聖霊の働きを、何よりも交わりそのものに対して信頼を置くことができるのでしょうか。

ですから、そういう意味からすると、今日の御言葉は、教会の誕生を祝う、こ

の良き日に聞くにはふさわしくない御言葉だとも言えるのでしょうか。ペンテコステを迎え、さあこれからだと思っている人の気持ちに水を差すことにもなるからです。けれども、教会がこの地上に建てられたということが、今私たちの目の前にある出来事に目を塞ぐものであるとしたら、それは、聖書の信仰からはかけ離れたものとなってしまいます。なぜなら、この聖家族のあり方そのものが教会の姿であり、ここにまた、イエス様の出来事を伝えんとする聖書のメッセージがあるからです。だから、それを語ろうとして、御言葉は、この三つのそれぞれの出来事を語っているわけですが、それぞれで「預言者を通して言われたことが実現するためであった」と旧約聖書と関連付けるのはそのためです。そして、それは、ここに神様の働きがあるからでもあります。しかし、ここでは聖霊という言葉は直接的には用いられてはおりません。けれども、ここに聖霊の働きを見ることができるとは、先ほども申し上げているように、聖霊とは交わりを創り出す霊であるからです。それゆえ、人と人とを、出来事と出来事を繋ぎ、そして、そこに現されるものがまさに神様の御心でもあり、ですから、それが今日の聖書のメッセージであるということです。

それゆえ、私たちは、神共にいますということをごこのことから理解することにもなるのですが、では、聖家族の立場ではなく、それとはまた別の立場に身を置いてしまったらどうでしょうか。しかも、自分の意に反する状況に身を置いたとして、そこにまったく意味を感じることができないとしたらどうでしょう。あるいは、その反対も然りです。自分が願うポジションに身を置き、けれども、起こった出来事に意味を見出すことができないとしたらどうでしょう。それが、ここに登場するヘロデでもありますが、ただ、意に添おうが、意に反しようが、また、意味を見出そうが、意味を見出すまいが、それぞれが関わり合い、繋がりが合っているところに現されているのが、神様の御心でもあるのです。ですから、もし、今日のこの御言葉を御言葉として正しく理解しようとするなら、ここに記されているすべてのことに神様の御心を見出さなければなりません。そのためにも、私たちはその判断を聖霊の働きに委ねなければならぬのですが、そこで一

番の問題は、私たちがどうすれば、それができるのかということです。

今日がペンテコステであり、また、教会の原点が聖家族の姿そのものであることを思えば、そのために必要なことは、炎のような舌が別れ別れになって私たち一人一人に臨むことなのかもしれません。それは、経験に勝るものではなく、それゆえ、そうした聖霊体験がすべてのことを解決へと導くことにもなるからです。ですから、私もそうですし、皆さんも恐らくはそうです。そのような経験をすることはなく、このことはつまり、その可能性はまだ残されているということです。ただし、ここでそれが実現可能かどうかを問うても仕方ありません。あるとも言えるし、ないとも言えるからです。ですから、その中で、はっきり、ある、と言えることだけに限定したいと思うのですが、それが、ペンテコステのこの日、御言葉が私たちに語らんとしていることでもあるのです。それは、神のリアリティー、聖霊のリアリティーです。聖霊降臨の出来事についての使徒言行録の証言は、弟子たちの上に、つまり、私たちの上に、リアリティーをもって臨んだものが聖霊であり、私たちはその力の中に置かれているということです。そして、この力は、私たちが視覚などの感覚を通して実感できるかできないかにかかわらず、私たちの上には絶えず注がれているものなのです。ですから、あるのかないのか分からないものが、この聖霊の働きなのではなく、間違いなくある、それが聖霊の働きであり、聖家族と弟子たちの上に臨んだことは、この神様のリアリティーそのものであるということです。

では、どうしたらそれを感じ取って、我が身のすべてを委ねることができるのか。それは、祈りを通してということでもあるのでしょうか。ただし、これは、時折、申し上げていることではあります。が、私たちにとっての祈りとは、おねだりでもなければ、つぶやきでもありません。もちろん、神様の御前でいい子ぶることでもありません。そういうことはあってもいいのですが、それだけではないということです。なぜなら、祈りとは、聖霊の働きによって、神様の御前に私たちの存在全てが置かれることであり、それゆえ、御前に立つことで直ぐ近くにいますイエス様を感じるということです。

うことだからです。神共にいますということ、そういうことであり、そのことを私たちは、こうして礼拝において、また、祈りにおいて、さらには、様々な主にある交わりにおいて、まさに、リアリティーをもって感じるようになるのです。ところで、では、このリアリティーを感じる上での道筋、プロセスは、具体的にはどういったものなのでしょうか。

聖家族と弟子たちが経験したことはこのリアリティーであったわけですが、それを彼らはどのように経験したのか。私たちはこのことをどうしても難しく難しく考えてしまうのですが、それは、それほど難しいことではありません。先ほど、私たちの信仰が弱者の信仰、未熟者の信仰と申しましたように、その私たちが神様の御前に置かれているということは、神様の御前にあって丸裸にされているということなのです。つまり、身も心も魂をも、私たちのすべてを神様の御前で丸裸にするものが聖霊の働きであり、また、丸裸にされればこそ、私たちは取り繕うのでもなく、また、気取るのでもなく、弱く、拙いそのままの自分を神様とイエス様が愛してくださっているということを知るのです。ですから、聖家族も弟子たちも、聖霊の働きに直に触れることができたのは、丸裸にされたがゆえのことであり、それが、この神様が強く自分たちのことを捉え、掴まえてくださっているということで、つまりはそれが、神のリアリティーというものなのです。

ですから、このリアリティーを私たちが信じるためにはどうしても聖霊の働きが必要なのです。一人では信じることができない弱い者も、聖霊の働きがあればこそ交わりの中へと導かれればこそ、右も左も分からない丸裸のままの自分が神様との交わりに生かされていることを知るのです。まただから、父と子と聖霊なる神様の交わりの中に置かれることで、私たちは人として霊的に成長することになるのです。そして、そこにあるものが愛であり、この愛とはすなわち、戒めであり、掟でもあるのです。なぜなら、戒めも掟も、私たちが守る守らないということが先ずあってのことではなく、神ご自身が「愛」というこの一つの枠組みの中に自らを留め置くために、神様自らが定められたものだからです。つまりは、神様の正しさを徹底的に貫き通すもの、

それが愛であり、戒めと掟というものはいわば、その内と外とを現す境界線、座標軸のようなものでもあるのです。ですから、愛は、私たちの都合によって左右されるものではありません。私たちの心持ちやその時の気分によって都合良くころころ変わるものではなく、ですから、聖家族の姿は、まさにこの神様の愛を正しいものと信じ、貫く信仰がそこに現されているということです。そして、それがイエス様をその胸に受け止めるということでもありますが、それゆえ、愛は、交わりを交わりたらしめることとなり、そして、聖霊はそのために私たちの中で働いてもいるのです。それゆえ、この交わりに生きる私たちの中には、丸裸のままの私たちを支えんとする神様とイエス様への素直な思いが自ずと溢れ出るようになります。自分への拘り、様々なものへの拘り、私たちが手放すことの難しいこれらのものを手放すことになるのは、教会という交わりの中で丸裸のままにすることに、私たちが心から安心できるからです。

ただし、丸裸であるということは、一方では、私たちがこの世の様々な苦難を引き受けねばならないということなのです。ですから、そこには不安や恐れ、様々な心配事が目の前に置かれることにもなるのですが、けれども、その時、それを互いに担い合えばこそ、そこに交わりが築かれ、それゆえ、私たちの交わりにおいては、課題を押しつけ合ったりすることもなく、また、自分一人で全てを抱え込んだりすることはありません。それがイエス様が私たちに求めることではないからです。そして、聖家族がイエス様をその懐に抱え、丸裸のままの自分を神様に委ねたように、全てを共にするところに現されるものが私たちの信仰でもあるのです。ですから、丸裸であることの恥ずかしさと、この恥ずかしい私たちを愛し、聖霊の働きをもって受け止めてくださる神様とイエス様に感謝し、藤沢教会という主の交わりに連なり、主の教会を喜びの大きい交わりにすべく、御心に応えて参りたいと思います。

祈りましょう。